高かりし事、一の卷にいへり、髮も長かりしとみえて、古事記（神代の卷）に、大穴牟遲神を八十神憎み玉ひて、殺さんとたくみ玉ふて寐ましたる時、かの神の髮の毛を臥し玉ひたる室の每椽に、結著たる事みえたり、（古事記傳卷十に說ありて、そのまゝ髮の毛の長しとせり、）されば女はなほさら長かりけんかし、さて八百年の中昔になりても、女の髮今にくらぶれば、甚長く身の長にあまれり、つら〳〵おもふに、むかしは水油のみつけて（油の事次にいふべし）かきたらしおくゆゑ生延やすく、今はをさなきより油にかためてちゞめ結ゆゑ、むかしよりは長からぬにやあらんかし、

〔日本書紀（十應神）〕十一年十月、是歲有人奏之曰、日向國有嬢子、名髮長媛、卽諸縣君牛諸井之女也、是國色之秀者、天皇悅之、心裏欲覓、

〔萬葉集（二相聞）〕三方沙彌娶園臣生羽之女、未經幾時臥病作歌三首、（一首略）

多氣婆奴禮、多香根者長寸、妹之髮、比來不見爾、搔入津良武香、

三方沙彌娘子

人皆者、今波長跡、多計登雖言、君之見師髮、亂有等母、

〔文德實錄〕一嘉祥三年五月壬午、葬太皇太后（嵯峨后橘嘉智子）于深谷山、（中略）后爲人寬和、風容絕異、手過於膝、髮委於地、觀者皆驚、

〔大鏡（三左大臣師尹）〕御むすめ、（師尹女芳子）村上の御時の宣耀殿女御、御かたちおかしげにうつくしうおはしけり、うちへまゐり給ふとて、御車にたてまつり給ひければ、わが御身はのり給ひけれど、御ぐしのすそは、もやのはしらのもとにぞおはしける、ひとすぢをみちのくにがみにをきたるに、いかにもすぢ見えさせ給はずとぞ申つたへためる、

〔大鏡（七太政大臣道長）〕御てぐるまによとところ（道長四女、彰子、威子、妍子、嬉子、）たてまつりしぞかし、（法成寺供養之日）くちに、大宮（彰子）皇太后（妍子）御そでばかりをいさゝかさしいでさせ給ひて侍りしに、びはどのゝ宮（妍子）の御ぐしの、つちにいとながくひかれさせ給ひて、いでさせ給へりしは、いとめづらかなり